

# 「正論が通る」日本へ

一般社団法人 救国シンクタンク 所長・理事長

くらやま  
倉山 満 みつる



聞き手  
むらたて いさお  
室舘 勲  
(株式会社 潮流社)  
代表取締役社長

## 憲政史の道へ

——倉山先生は今「救国シンクタンク」を立ち上げ、精力的にご活動でいらっしゃいます。日本にシンクタンクが必要だと捉え、立ち上げるにいたったのかをお伺いしていきたいです。まずは生い立ちから簡単にお伺いできますか。



倉山 満 氏

倉山 1973年、香川県の普通寺市に生まれました。その後、父親の転勤に伴い、徳島県で数年過ごし、小学校三年生からは香川県の丸亀市でした。高校卒業までは地元で過ごし、大学進学を機に、東京に出てきました。このままだと地元で一生骨を埋める人生で終わるな、東京に行けば人生変わるかな、と思って、一度は東京を覗たくて上京を決めました。

中央大学の文学部史学科に入学し、弁論部に所属しました。私にとってはこの弁論部での活動が大学生活だったという感じです。全関東学生雄弁連盟（通称・全関）といって、学内だけではなく関東の大学の弁論部みんな仲間という感覚があり、学内・学外問わず様々な出会いもありました。同じ中央大学の三つ上の先輩が上念司さん。一つ後輩が現在、

自民党衆議院議員の武井俊輔さん。さらには一つ下の後輩が立憲民主党の道下大樹。他にも政治家になるような人もいて。他の大学でも、例えば明治大学で、現在、立憲民主党の衆議院議員の森山浩行さんとも仲良くなりました。人脈の広がる良いサークルでした。

問題は、喋りはうまくなったが大して勉強はしていない、ということでした。90年代、当時の大学生たちはバブル崩壊にも気づかず、日本は永久に高度経済成長し続けるというお気楽な考えが大半でした。だから大した危機感もなく、勉強もしていません。私は勉強しなければと思い、大学院で何を勉強したいかと考えました。1993年、自民党が政権から滑り落ちるといふ史上初の出来事が起きました。すぐに取り戻したりと行ったり来たりしたわけですが、双方が「憲政の常道」と言

っていたので「憲政の常道ってなんだろう？」と思い、昭和初期から憲政史を勉強し直しました。

## 言論の道へ

修士論文に取り掛かっている時、国士館大学からお声がかかり、国士館大学日本政教研究所非常勤研究員として所属。その後、正式な採用にならなかつたり、他の団体に所属したりと紆余曲折ありましたが、国士館大学から「日本国憲法」の授業の講師依頼がありました。帝国憲法を学んでいたものの、日本国憲法は学んでいませんでしたのでさすがに固辞しましたが、次にお話をいただいた時には受けられるように独学で学んでいました。すると2年後に再度お話をいただき、非常勤講

ありがたい状況につながりました。

—— 当時はすごいペースでしたね。

**倉山** ありがたくも忙しくなりました。その間、「倉山塾」として倉山から帝国憲法を学ぼうという会を運営し、そちらにも人が集まりました。

## デフレの原因は日銀人事だった

**倉山** 『財務省の近現代史』の執筆にあたり経済を学ぶ中で、経済問題は本来、政治問題ではなくて官僚が担当すべき行政問題なのに、なぜいつまで経っても不況なのか。それは結局、日銀人事が天王山であり、白川方明日銀総裁（当時）がデフレ経済のガンであることに気づきました。そこから「白川を討て」と言論を展開して、メディアへ出演したり、安

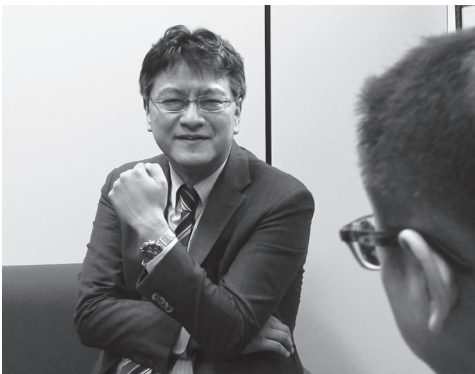
師を務めました。数年経ち、2009年、弁論部の先輩の上念司さんと東大弁論部の瀧本哲史さんから言論の分野で勝負してみないかというお誘いをいただきました。「自分の評価は自分が評価するんじゃない、自分の力を信じて勝負してみろ」と言ってくれたのでやることにしました。

当時何者でもないのに、「倉山満の砦」というブログを始め、瀧本哲史さんが講談社を紹介してくださり、2011年にデビュー作『誰が殺した？ 日本国憲法！』（講談社）を上梓。上念さんが紹介してくださり『財務省の近現代史』（光文社）、それが扶桑社の方の目に止まり『嘘だらけの日米近現代史』（扶桑社）と出版が続きました。「嘘だらけシリーズ」はお陰様で大ヒット作品となり、そこから執筆の依頼が止まらなくなったという、

倍内閣をもう一度作ろうという動きに参画したりもしました。

そうして応援していた安倍内閣は、日銀人事に手を入れ、金融緩和を展開できたことは良かったのですが、それを打ち消す「消費増税」をしてしまった。結局、官僚機構をシンクタンクとしてきた自民党政治の歪みが根本にあるために、敗戦国からの脱却は実現されなかったと考えています。

さらに、当時の言論人も「安倍総理の言動全てを盲目的に支持する人」「安倍総理を応援する人を批判する人」「安倍総理を応援する人を批判する人を批判する人」……。という状況でした。そのフィールドからは距離を取り、独自のメディアを持って、正しい教養と情報を発信しようと2013年に「チャンネルくらら」を開設しました。私の活動も



「書籍の出版」「倉山塾」「チャンネルくらら」の3本柱の運営を進め、2020年、長年、日本に必要なだと思っていたシンクタンクの立ち上げをしました。それが「救国シンクタンク」です。

## 日本の政治に足りないのは「シンクタンク」

——なぜシンクタンクが必要なのでしょう。倉山 日本が、正論が通る国になるためには近代政党が必要で、そのためにはシンクタンクが必要であったからです。

過去、大日本帝国を研究する中でわかったことは、歴史観の嘘です。日本が戦争に負けたのは「日本のような小国が、調子に乗ってアメリカやソ連といった大国に歯向かったからだ」というのは「日本は悪い国だ」という

中だったからです。正論が通る世の中にするためには「近代政党を作る」べきです。近代政党の定義はいろいろありますが、重要な一つは「シンクタンクを持っていること」です。

政治家は常に選挙で忙しくて、何が正しいのかを勉強するヒマがありません。なので政

治家が官僚から政治を学んでいるという歪な状況です。本来、政治家が監視・牽制すべき対象の官僚から政治を学んでいて

前提に立っていることに気づきました。事実を捉え、イデオロギーを排除して考えると、当時の日本は陸軍も海軍も世界最強で、経済もそこそこでした。一騎打ちではどの国にも負けるはずのない日本がなぜ負けたのかというと「ソ連の片手間に中国の片手間にイギリスの片手間にアメリカと闘ったから」です。当時の大日本帝国は強かったけど考えが間違っていた。なぜ間違っていたのかというと、日露戦争後、二大政党制が機能的に育たなかったからです。

戦前は「総力戦研究所」という、官と民と軍を合わせた、優秀なシンクタンクがありました。しかし彼らの意見は全て通らなかつた。正しいことを言っていたのに、日本政府は何も採用しなかつたのです。

間違ってしまう要因は正論が通らない世の中、政治が機能するはずがありません。官僚が間違えれば政治も間違えるのです。他国では官僚に対する牽制のためには、官僚に対抗できるだけの「シンクタンク」を政党が持っています。そんな政党が日本にも必要であり、そのためにもシンクタンクが必要だという結論に至ります。

## 国内の3つのシンクタンク

——国内に近代政党に見合うシンクタンクは存在しないですか。

倉山 シンクタンクは国内にもありますが、私が理想とするシンクタンクはありませんでした。国内のシンクタンクは大きく3つに分けられます。

① 一つ目は官僚機構そのものです。現状の

日本では、政権与党は常に自民党であり、自民党は官僚機構をシンクタンクとして活用しています。しかしそれでは、官僚が間違っていれば、政治家も間違っています。

②二つ目は「〇〇総合研究所」にありがちな、官僚機構の下請けです。仮に、独自の政策を提言できたとしても、即効性のあるものしか提言できません。下請けだからです。

上記二つに共通しているのは、行政問題に対して分析提言しているだけであって、政治ではありません。私がやりたいのは行政ではなく政治です。行政に振り回されてはいけません。

③三つ目は「空理空論を言っているシンクタンク」。政治問題に言及しているとしても実現させる気がありません。年に一回、新聞に意見広告を打ち上げているだけです。私が

ている。それは「軍隊を持つ」という基本的な合意です。日本にはそれがありません。自衛隊が軍隊なのかどうかも意見が分かれている。日本が軍隊を持つかどうかという合意すら無い中で、救国シンクタンクがどこの党派につくことに意味が見いだせないのが現状です。将来、ちゃんとした国家観と憲法観のもとに二大党派に分かれたとしたら状況は変わると思います。

### 皇室からレジ袋まで

——救国シンクタンクはどのようなことをおこなっていきますか。

倉山 目指すのは「正論が通る日本」を実現することです。

現在、経済安全保障の江崎道朗先生、減税

やりたいのはそのどれでもありません。

現実の政治に警鐘を鳴らす提言をするためのシンクタンクを作りたいと思って、救国シンクタンクを作りました。

### 他国には「軍隊を持つ」という

#### 合意がある

——総力戦研究所しかり、良いシンクタンクが機能しなかった事例もある中でシンクタンクが機能するには、政治家との連携も大事ですね。

倉山 政党のお抱えシンクタンクになる可能性は排除していませんが、まだ日本自体がその段階にないと思います。アメリカもイギリスも、その他ヨーロッパも、多くは保守系とリベラル系の二大党派に分かれます。ただ、保守もリベラルも最低限の国家規範を合意し

と規制緩和の渡瀬裕哉先生、中国情勢の中川コージ先生らとともに役割分担をしながら、政策の立案や検証・分析などをおこなっています。政治家へのパイプも各方面にあります。世の中には、そうやって力を持つと「国を良くするためにはどんな悪いことでもしていかなければならぬ」という考えを持った人もいますが、我々は悪いことはやりません。

その上で、現代の政治に釘を刺す。例えばレジ袋。レジ袋有料化については多くの人が小売店に課せられた法律上の義務だと思っていますが、これは法律による義務化ではなく、省令による「強い推奨」であったことを明らかにしました。本当は例外もある中で一律有料義務化のように誤って世の中に浸透してしまっているために、消費者に誤った認識を与えてしまっているという指摘をすることがで





言し、世に普及し、政治で実現する。この提言、普及、実現を目指します。

必要です。それぞれの調査員が正しい提案を持って来ます。でもその中には「正しいし重要だけどやらない」という決断が必要になります。これが難しい。

細かい事を捨てても、大事なのは哲学。「国を救うとはどういうことか」「国が救われた状態とはどんな状態か」ということを考えて、日々の政策を考える。「正論が通る日本」を目指して我々は、正しいと信じる政策を提

きました。その他「二対一ルール」を政党の公約に入れてもらったり、皇室の皇位継承問題に対する言論を発信したりとしました。

その意味で、最近では「皇室からレジ袋まで」という言葉も使っています。皇室を守ることができなくては救国とは言えませんし、レジ袋程度の小さな政策すら指摘ができなくて何の話が通せるのか、という意味です。

例えば、ウクライナの情勢を受けて、日本がどうするのかを考えるのは当然ですね。ただ、ロシアによるウクライナ侵攻が起きる前まで、世間の論理の多数は「米中冷戦が重要だから、ロシアはほっといて良い」でした。しかしウクライナ侵攻が起こった途端、今度はロシアばかりに注視して、中国のことを全く見ていない。シンクタンクの役割は、多くの人々がロシアに目が向いている時にも中国

を注視することですし「中国に気をつける」と発信することです。世間で人気のある話題だけを扱ってはいは理想のシンクタンクではありません。

## 今、何が重要な 이슈ーなのかを見極める

——救国シンクタンクのこれからについてお願いします。

**倉山** 救国シンクタンク所長としての大事な仕事は「何が大事な政策かを見極める」ことです。各研究員の調査結果はどれも大事です。その中で、今は皇室なのか、経済なのか、どの議論がその瞬間で重要な 이슈ーなのかを見極めて優先順位をつけることです。あれも大事、これも大事なのは当然です。しかし人間も限られているし、現実的にも優先順位は

——本日はありがとうございました。

### ■くらやま・みつる ■

1973年 香川県生まれ。

1996年 中央大学文学部史学科日本史学専攻

単位取得満期退学。専門は日本近現代史。在学中から、国士館大学日本

政教研究所非常勤研究員などを歴任。

個人ブログサイト「倉山満の砦」を

開設。

2011年 デビュー作『誰が殺した？日本国憲法！』（講談社）を出版。後に、年

に6〜12冊のペースで出版。

2012年 倉山塾を開講。

2013年 インターネット番組「チャンネルくらら」を創設。

2020年 一般社団法人 救国シンクタンクを設立。

現在「倉山塾塾長」「救国シンクタンク理事長兼所長」「憲政史研究者」「皇室史学者」を務める。